令和７年度 青葉研修会

奥能登農林総合事務所

１ 生育概況

１）生態

○ 生育調査園の中生品種「筑波」は、雄花満開期が６月１７日頃と昨年に比べて２日遅く、雌花満開期は６月２０日頃となっている。

○ また、早生品種の「丹沢」の雌花満開期は、生育の早い園（輪島市三井内屋）で６月１０日頃、平均的な園（能登町柳田、穴水町山中）で６月１２日頃、遅い園（能登町瑞穂）で６月１５日頃となっている。

	本年	昨年	昨年比	平年比
展葉期	４月２１日	４月２３日	－２日	－９日
雄花満開期	６月１７日	６月２１日	－４日	－８日
収穫始期		９月 28 日		

２）病害虫の発生など

○ 降霜による影響で、２～３年生の樹や成木の主枝単位で枯死が散見される。

暖冬による凍害によって助長されたものと考えられる。

３）炭疽病対策について

○ 令和６年度に炭疽病が多発した園では、枯死した枝やせん定枝が令和７年度の発生源となり、炭疽病が多発する可能性がある。多発した園についてはモモノゴマダラノメイガの防除時に殺菌剤を混用する。

散布時期	薬剤	対象病害虫
７ 月 中 下 旬	エルサン乳剤 1,000 倍 ベンレート水和剤 3,000 倍	モモノゴマダラノメイガ 実炭疽病
７月下旬～８月上旬	フェニックスフロアブル 4,000 倍 （ベルクートフロアブル 1,000 倍）	モモノゴマダラノメイガ （実炭疽病）

２ 今後の栽培管理

１）夏季せん定

○ 低樹高栽培（徒長枝利用栽培）は、徒長枝を次年度の結果母枝として利用し、果実をとる栽培方法

○ 夏季せん定の１番の目的は、夏季に不要な徒長枝を間引き、次年度の結果母枝となる徒長枝を選抜することにあり、低樹高栽培を行う上での重要な管理になる

○ さらに、農薬散布の効率が高くなる、結果枝の日当たり改善による増収効果も期待できる（別紙）ので、確実に実施しましょう！

point! 夏季せん定の方法

せん定する枝（間引く枝）

① 主幹付近から発生する徒長枝

② 主枝・亜主枝の地面側に発生する徒長枝

③ 樹幹の内部方向に発生する徒長枝

④ 発生角度60°未満の徒長枝

→ **約60～90°で発生する徒長枝を残す**

主枝先端 ←→ 樹幹内部方向

主枝先端 ←→ 樹幹内部方向

せん定前

せん定後（受光・通風環境が改善）

２）土壌管理

（１）施肥（実肥）

下記を目安に施用する。７月上旬の時点で結果枝長が５０～６０cm 以上ある場合（樹勢が強い場合）は施用量を控える。

くりの樹齢別施肥基準目安（成分量　kg／10ａ）

時期	基肥（11月）			実肥（7月上旬）			礼肥（9月下旬）			合　　計		
樹齢	N	P	K	N	P	K	N	P	K	N	P	K
1～2年生	5	5	5	－	－	－	2	1	2	7	6	7
3～4年生	6	6	6	3	1	4	3	1	4	12	8	14
5～6年生	11	11	11	5	2	6	3	1	4	19	14	21
7年生以上	14	14	14	5	2	6	3	1	4	22	17	24

※N：窒素、P：燐酸（P_2P_5）、K：加里(K_2O)

（２）除草

土壌のひび割れを防ぐため（乾燥を防ぐため）、土壌表面が露出しない程度に除草を行う。

＜参考＞　夏季せん定が収量に与える効果

＜試験の概要＞

夏季せん定が収量性に与える影響と、作業の少ない６月に処理を行う「早期夏季せん定」の効果を検討するため、穴水町で実証圃を設置した。

〇供試品種：丹沢（１５年生）

〇試験区　：６月区（早期夏季せん定）、７月区、無処理

〇調査項目：総着毬数、果数・果実重量、果実径別収量割合

＜結果＞

〇夏季せん定を行った６月区（と７月区）は、樹冠内が明るく、樹の上層から下層部まで着毬があった（図１）

〇一方、無処理は、樹冠内が暗く、樹の上層部のみに着毬があった。

〇着毬数と収量は、無処理に比べ６月区と７月区が約２倍多かった（図２）。

〇大玉果（2L 以上）の収量割合は、無処理に比べ６月区と７月区が 15%以上多かった（図３）

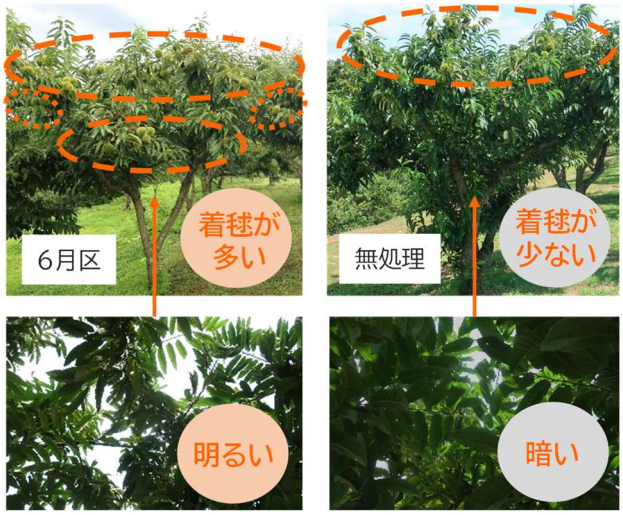

図1 樹冠内の明るさと着毬量の関係(8月)

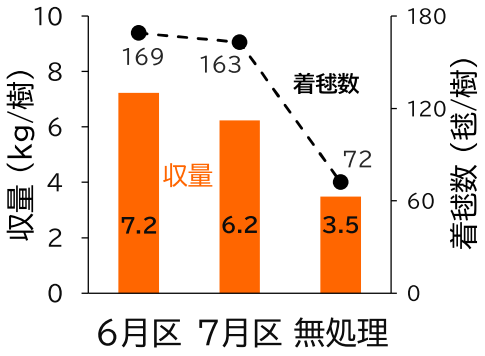

図2 着毬数と収量

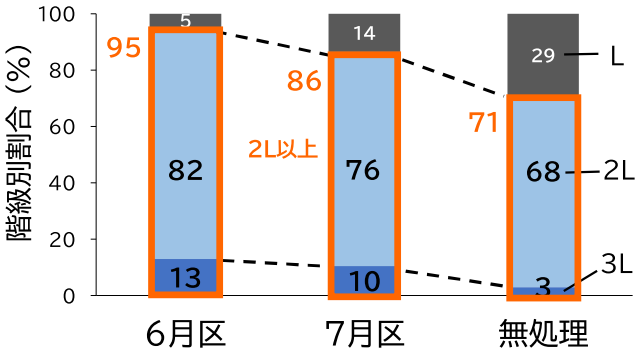

図3 果実径別収量割合

以上の結果から、①夏季せん定によって樹冠内の明るさが確保されることで大玉多収生産でき、②作業時期を6月に早めても7月と同等の効果が得られると考えられた。